

史上最高のラブ・リベンジ

Eri & Masato

冬野まゆ

Mayu Touno



エタニティ文庫

目次

史上最高のラブ・リベンジ

5

書き下ろし番外編
桜の下で

333

史上最高のラブ・リベンジ

プロローグ 天国と地獄

【サクラちゃん、彼にプロポーズされました。幸せ過ぎて、天にも昇る気持ちです。 絵梨】

制作会社である株式会社ストロボ企画。その企画部に籍を置く逢坂絵梨は、行きつけのカフェに残した知人宛のメッセージを思い出し、慌てて両手で頬を押さえた。そうしていないと、自然と頬がニヤけてしまうからだ。

十一月に入り、冬と呼んでもいい寒さが続いているはずなのに、今は上着を脱ぎたくなくなるくらいに頬が火照っている。

——だって、好きな人にプロポーズされたんだもん。これが喜ばずにいられようか。

だが、まだ周囲の人にこの喜びを悟られるわけにはいかない。

自分のデスクに両肘をついて頬を包み込む絵梨は、一人でニヤニヤして変に思われて

いないか心配になり周囲を見渡した。

だけど他の社員も、絵梨ほどではないが、少なからず笑い崩れているので大丈夫そうだ。

絵梨は同僚たちの相好を崩す様に、納得をする。

——皆、嬉しいよね。

何故なら、先ほど超一流企業のCM制作をかけたコンペティションで、我が社の企画が採用されたという連絡があったからだ。ストロボ企画のような中堅の制作会社にとって、またとないビッグビジネスのチャンスに、企画部の社員全員で喜びを分かち合っている。

「まさか殿春総合商社のCMを、ウチが取れるとは思わなかったぜ」

そう声をかけてきた男性社員に、絵梨は笑みを浮かべてピースサインを返す。

かくいう絵梨も、この企画にはサポートとして参加していた。

殿春総合商社の歴史は古く、設立は明治にまで遡る。当時は筑紫乃商会という社名で、明治維新以降、貿易事業を足がかりに天然ガスや石油燃料の資源開発を手がけて大きく成長した超一流企業だ。

その殿春総合商社が、社名を現在のものに改めて五十年となる節目に、いくつかの記念プロジェクトを立ち上げた。その中の一つがCM制作だ。

普通なら、そんな大きな案件がストロボ企画のような中堅制作会社に回ってくることはない。しかし、殿春総合商社はCM制作を任せるにあたり、コンペティション形式で多くの企業に門戸を開いたのである。

そして今日、名のある大手企業も参加したコンペティションの中から、我がストロボ企画の案が採用されたと、この件を統括する安達部長から知らされたのだ。

もちろん絵梨も、自分の携わった企画が大手企業に採用されたことは素直に嬉しい。でもそれ以上に、絵梨にとって、今回のコンペティションで自社の企画が採用されたことには特別な意味があった。

今回のコンペティションに携わっているメンバーの中には、絵梨の恋人である比留川一樹も含まれる。

二十五歳の絵梨より五歳年上の比留川は、今回のコンペティションに並々ならぬ意気込みを持って取り組んでいた。

プライドが高く負けず嫌いの彼は、どうしてもこのビッグチャンスを自分のものにしたかったらしい。

その意気込みを示すかのごとく絵梨に、「今回のコンペティションで、ウチの企画が採用されたら結婚しよう」と、プロポーズしてきたのだ。

そして「契約が取れたら、その場で皆に婚約宣言するから」と絵梨に話し、絵梨に全

力でのサポートを求めてきた。

絵梨としても、好きなCMの仕事に携われるのは嬉しかったし、好きな人の役に立てるのもとても幸せなことなので、比留川の希望に添うべく全力でこの企画に取り組んできた。

その結果、絵梨が立てた企画と言っても過言ではないほど、プランから絵コンテ作り、予定キャストのスケジュールの仮押さえまで、絵梨が担う結果になってしまった。

そこまでも自分の名前が表に出ないことは承知していた。だが、たとえ名前が残らなくても、それが比留川との未来に繋がっているならそれでいい。

——大変だったけど、頑張った甲斐があったな。

今までの苦勞をしみじみと噛みしめていたら、誰かに肩を叩かれた。

顔を向けると、隣のデスクに座る三輪郁美が、背中を椅子の背もたれに預けて絵梨の顔を見ている。

「逢坂さん、嬉しいのはわかるけど、ちよつと顔緩みすぎ……」

仕事場で一番仲のいい郁美の遠慮のない表情から察するに、絵梨はそうとうニヤけた顔をしていたようだ。

「……はは」

比留川との関係は、彼の要望もあって社内ではずつと秘密にしてきた。だから、今は

まだ郁美にも話すわけにはいかない。

とりあえず、このふやけきった顔をどうにかしてこよう。

絵梨は「ごめん、ちょっとお手洗い」と、席を立ち、廊下へと出た。

「あつ、絵梨ちゃん」

廊下に出てすぐ、鼻にかかった声に呼び止められた。

その甘えた声の主にピンときて、幸福感でいっぱいだった絵梨の頭が一瞬で冷静になる。

「安達さん……どうかした？」

無視するわけにもいかず笑顔を作って振り向くと、案の定、最近同じ部署に異動してきたばかりの安達桃花の姿があった。

絵梨と目が合うと、桃花は栗色の長い髪を耳にかけ、グロスに濡れた唇をはころばせた。

小柄で色白な桃花は、若手の男性社員の間では無垢な天使のようだと人気が高い。確かにこういって表情は、同性の絵梨でも可愛いと思った。

「やだ。桃ちゃんでいいのに」

近付かれると、甘ったるい声と同じくらい、甘い香水の匂いが嗅覚を刺激してくる。

——名前にちゃん付けて……

ここは女子校か、と、眉をひそめたくなるのをぐっと我慢する。

若手男性社員の評価とは裏腹に、女性社員の間では、桃花はすこぶる評判が悪い。

ワガママで自己中心的。自慢好きで、ブランド好き。人の傷付く発言を平気でする子……。そういった悪評を、彼女が異動してくる前から耳にしていた。そして同じ部署で働くようになったことで、それが根も葉もない噂ではないことを理解する。

絵梨としても、桃花の勤務態度を窺めたいと思ったのは一度や二度ではない。

だが面倒なことに、彼女は安達部長の愛娘なのだ。

噂によると、縁故で入ったが労働意欲の薄い桃花はどの部署も持て余され、巡り巡って父親である安達部長が押しつけられたらしい。

「会社なので、ちゃん付けはちよつとどうかと……」

やんわり断る絵梨に、桃花は軽やかに笑う。

「やだあ、パパが部長だからって、私にそんなに恐縮しなくていいわよ。もつとフランクに話しかけて」

——恐縮？ それに、フランクって……

同じ平社員。むしろ絵梨が彼女の一年先輩に当たる。それなのに桃花は、自分の方が絵梨より格が上だと信じて疑わない。

別に一年先に入社しただけで先輩面をするつもりはないけど、部長の娘というだけでここまで上から目線でこられると、さすがにモヤツとしてしまう。

でもそういう一般常識を説いたところで、桃花は「そんなつもりじゃなかったのに……」と、大袈裟おおげうに落ち込み、男性社員の同情を誘う。その結果、正論を口にした側が気まずい思いをすることになるので、関わりたくないのが一番なのだ。

ここは、桃花の言うことなのだからと割り切って、すぐに気持ちを切り替える。

「で、安達さん、なんか用事？」

さすがに、名前の呼び方について議論するために自分を追いかけて来たとは思えない。

そう思い、用件を確認する絵梨に、桃花が「そうそう」と、笑顔で軽く手を叩いた。

「今回の殿春総合商社のコンペティション、絵梨ちゃんがすごく頑張ってくれたんだってね。ありがとう」

「ああ……いえ……」

突然、お礼を言われて戸惑う。そしてすぐに、「ん？」と、首をかしげた。

確かに絵梨は比留川のアシスタントとして今回の企画に参加していた。だが、コンペティションのサポートをしていたことは、絵梨と比留川、二人だけの秘密のはず。

安達部長でさえ知らないはずの話を、何故桃花が知っているのだろうか。

「それに、なんだかごめんなさい」

「え、なにが？」

「秘密。……ただ、謝っておきたくなったの」

ふふふっと、桃花が目を細めて意味ありげに笑う。そして「じゃあね」と、小さく手を振り企画部のオフィスに入ってしまった。

——謝るといふか、なにか悪いことを企たくらんでいそうな感じがしたんですけど……

「……まあいいか」

今は比留川の婚約宣言を、パートナーとして恥ずかしくない態度で待つことの方が重要なのである。

桃花と別れ、気持ちをはれさせた絵梨がトイレからオフィスに戻ると、沸き立つような拍手の音が聞こえてきた。

さらに、あちこちから「おめでとー」「上手うまくやったな」という、祝辞の声も聞こえてくる。

何事かと思ってオフィス内を見渡すと、安達部長の隣に比留川の姿を見つけた。彼はしきりに、周囲から「おめでとー」と肩を叩かれたりしている。

——一樹さん、嬉しそう。

いつも強気で自信に満ちた表情を浮かべている彼だが、今日は特に嬉しそうな表情を

見せている。

オフィスを包む祝福の空気に、比留川のために頑張ってきたことが、結果的に皆の幸せにも繋がっているのだと実感できて絵梨も嬉しくなる。

満ち足りた思いで祝福の光景を眺めていると、一瞬、比留川と目が合った。でも、すぐに彼は絵梨から視線を逸らしてしまふ。

「あれ……?」

——てっきり微笑みかけてくれると思ったのに。

それが最初の違和感だった。そしてすぐに、それより大きな違和感を覚える。

何故か、安達部長と比留川の隣に桃花が立っているのだ。

そして、周囲の人たちは、どうやら比留川と桃花に向かって拍手をしている。

コンペティションの成功を讃えるのであれば、比留川の隣に、桃花が寄り添っているのはおかしい。

「ねえ、なにかあったの?」

胸騒ぎを覚えた絵梨は、席に戻り隣の郁美に声をかけた。

「ああ、驚かないで聞いてね」

そう断り、郁美が絵梨の耳元に顔を寄せる。

「比留川さんと安達さんが、ついさっき婚約を発表したのよ」

「……え? ——ええええっ!?!」

耳に入ってきた情報を、上手く理解出来ない。

思考が追いつかず驚きの声を上げる絵梨を、比留川が一瞥する。だがすぐに、無関心な様子で視線を逸らした。そんな比留川の隣で、桃花が勝ち誇ったように微笑む。

「絵梨ちゃん、ありがとう。そんなに喜んでもらえるなんて嬉しい。皆さんの祝福を裏切らないように、一樹さんと二人で、幸せな家庭を作ります」

桃花の初々しく聞こえる言葉に、周囲から再び拍手が沸き起こる。

「……えっえっえ」

——ちよつと待って、私は?

驚きのあまり、思っていることが声にならない。救いを求めて比留川に視線を向けても、彼はこちらを見てもくれない。まるで他人事のような。

これはどういう種類の冗談なのだろうか。というより冗談であって欲しい。

でも冷めた比留川の横顔を見れば、これは冗談などではないとわかる。彼は絵梨を裏切り、桃花を選んだのだ。

——天国から地獄。

呆然と立ち尽くす絵梨の頭に、その言葉がこえました。

1 復讐するは我にあり

【絵梨ちゃん、おめでとう。

でも天にも昇るなんて、死んじやいそうでちよつと心配になるよ。

サクラ】

比留川と桃花の婚約発表から一週間。

絵梨は、久しぶりに行きつけのカフェ、『一葉』を訪れた。

定位置であるカウンターの右端の席に腰を下ろし、カプチーノを注文する。そして、目の前にあるアンティーク調のテーブルランプの下からピンク色のメモを引っ張り出した。

そのメモには、絵梨宛てのメッセージが書き込まれている。差出人の名前は、サクラ。絵梨同様、この店の常連だというサクラに、直接会ったことはない。だけど、文通のようなメッセージのやりとりを、もう一年以上続けている。

桜の花びらの形をしたメモに、可愛い文字で綴られた祝福のメッセージを見て、つい重いため息が漏れてしまう。

「暗っ！」

カウンターのの中から、低い声が聞こえてきた。

顔を上げると、飲み物を片手に大袈裟なほど口角を下けている幸根和也と目が合った。このカフェのオーナーである幸根は、客商売をしているだけあって、表情豊かで話が上手い。そんな彼が、絵梨を見て露骨に顔を歪めている。

「すみません」

泣きたい気持ちを堪えてクシヤリと笑うと、幸根が絵梨の前にカプチーノを置いた。

「なに？ マリッジブルーってヤツ？」

幸根の言葉に、それならよかったのにと、絵梨は眉を下げる。

「実は……」

「どうした？」

「彼との婚約……ってというか、そもそも付き合っていたこと自体が、なかったことになっちゃって……」

「はあ!? 一体なにがあった？」

絵梨の言葉に、幸根が目丸くする。

それと同時に、すぐ横から「えっ？」と、驚いたような声が聞こえてきた。

その声に驚き、絵梨が視線を向ける。一つ椅子を挟んだ左隣に座るスーツ姿の男性が、

驚きの表情で絵梨を見ていた。

「ああ、失礼」

会話を割り込んでしまったことが気まずいのか、男性が口元を手で覆って謝罪する。
「いえ。なんて言うか、こちらこそ」

突然隣でこんな話をされたら、驚くのも無理はない。軽く頭を下げた絵梨は、改めて男性の姿を見る。

座っていてもわかるほど、背が高い。スツキリした鼻筋に、ほどよく厚みのある唇。非常に整った顔立ちをした男性だ。あまりに整いすぎて冷たく見えそうだけど、わずかに垂れた目尻が人懐っこい印象を与えてくる。年はおそらく幸根と同じ二十代後半から三十代前半くらいだろう。

こちらを見つめる意思の強そうな眼差しに、目を奪われてしまう。
ついまじまじ見つけてしまったが、絵梨は彼に見覚えがあった。

会話をしたことはないけれど、彼もこの店の常連らしく、たまに見かけるのだ。自然と聞こえてくる会話から推察するに、幸根の古い知り合いのようだった。

「雅翔、盗み聞きはよくないぞ」

絵梨の予想どおり、気心の知れた仲なのか、幸根が軽い口調で男性を窘める。

「だから、ごめんって……」

「いえ、この場合、驚くような話を急に始めた私の方が悪いです」

咄嗟にフォローする絵梨に、雅翔と呼ばれた男性が頭を下げてきた。絵梨も軽く会釈を返す。そんな二人のやりとりを見て、幸根が意味ありげに口角を上げた。

「絵梨ちゃんさえよかったら、コイツも話に交せてやってよ」

「えっ……」

——ほぼ初対面の人にするような話では……

困惑する絵梨に、幸根がもっともらしく言う。

「悩み事なんて、一人で抱え込んでても苦しいだけでしょ。こいつは俺の昔からの知り合いで信用出来るし、何でも屋で経験豊富だから、きつといい相談相手になると思うよ」

「何でも屋って……」

なにか言いたげな雅翔の視線を無視して、幸根は、「それでは紹介から」と、絵梨へ手のひらを向けた。

「ウチの常連、逢坂絵梨ちゃんです」

突然始まった幸根の紹介に合わせて、絵梨は慌てて会釈をする。幸根は次に、絵梨へ向けていた手のひらを雅翔に移動させた。

「で、こっちは俺の友人で、何でも屋の雅翔君です」

——何でも屋って、本当にいるんだ。

メディアなどで、そうした存在を耳にしたことはあつたけど、実際にそれを生業なりわいとして
いる人を初めて見た。

「それで、絵梨ちゃんに一体なにがあつたワケ？」

幸根から先ほどの続きを促うながされて、視線を彷徨さまよわせる。

平日の閉店間際。店内には絵梨と彼しか客はいなかった。これなら、他の誰かに話を
聞かれる心配はない。

この一週間、自分の身に起こったことを、誰にも打ち明けることが出来ず、一人で悩
んで苦しかったのも事実だ。

——幸根さんの言うとおり、誰かに話を聞いてもらえば、少しは気持ちが軽くなる
かな。

正直、この気持ちは、一人で抱えるには重すぎる。

そう自分を納得させて、絵梨は重い口を開いた。

「付き合っていた人……少なくとも私はそう思っていた人に、『今回のコンペティショ
ンで、ウチの企画が採用されたら結婚しよう』『契約が取れたら、その場で皆に婚約宣
言するから』って、言われていたんです」

「うん。それは俺も絵梨ちゃんから聞いてる」

会社では二人の関係を秘密にしている分、聞き上手な幸根に、つい名前を伏せて彼と
のことを色々ノロケてしまっていた。

「だから……って言うと、語弊ごへいがあるんですけど、私、これまで彼の仕事を出来る限り
サポートしてきたんです。彼が接待で早く帰りたいって言えば、代わりに残業して仕事
を片付けたし。休日返上で、コンペティションに向けた情報収集をして資料作ったり、
こちらの意図をわかりやすく伝えるためのイラストボードを作ったり、タレントさんや
衣装デザイナーさんの日程をさりげなく探って、仮押さえしたり……」

CM制作のコンペティションは、ポーカーゲームに似ている。

良い企画を出すのは当然としても、参加者が互いに、手持ちの札を完全まことに晒さらすことな
く、相手により有効なカードを持っていてと匂わさなくてはいけない。

そのためには多少のはつたりも必要だ。だが、いざ仕事が決まってみたら中身が全然
違っていた、では目も当てられない。

そうならないように、あらかじめ関係者のスケジュールを仮押さえしておくことと、
契約が取れた際に仕事を受けてもらえるかの確認は欠かせないのだ。

しかも、話が流れた時に、相手をガツカリさせないよう配慮しながら進める必要があ
るので、細心の注意が必要となる。

「ここ二ヶ月ぐらい、ずっと忙しそうにしてたよね。休日に来てても、ずっとパソコンい

じったり、電話したりしていたし」

「その甲斐もあってか、コンペティションではウチの会社の企画が採用されたんです」

「へー、おめでどう」

この先に待っているのがバッドエンディングと承知しながら、幸根が拍手する。

絵梨は苦笑しつつ、ふうっと、ため息を漏らした。

「で、めでたく大手のCM契約が取れた途端、彼は部長の娘さんとの婚約を発表し、私との約束はなかったことになりました」

「ああ……」

黙って話を聞いていた雅翔が、苦い顔をして息を吐く。その向かいでは、幸根がオーバリアクションで天を仰いだ。

「あちゃー。やられたね。で、その彼は、なんて言ってるワケ？」

「それが……婚約発表の日から、彼にはずっと無視されていて……。目も合わせてもらえない状態だったんです……」

つくづく惨めだ。絵梨は両手で自分の顔を覆って俯いた。

「ああと……、じゃあメールとか電話で連絡取って、仕事とは関係ない場所で会って話し合ってみたら？」

幸根の提案に、絵梨は俯いたまま首を横に振る。

比留川の真意が知りたくて、すでに何度も、話し合いの場を設けるべく連絡を試みた。だけど、まったくと言っていいほど取り付く島がない。

それでもどうにか、比留川が一人になるタイミングを見計らって捕まえたなら、「社内ですトーカーングとかって、マジで気持ち悪いんだけど」と、侮蔑の言葉を投げつけられた。

酷い裏切り行為を受けたあげく、何故そんな扱いを受けなきゃいけないのか、さっぱりわからない。

絵梨がどうにかして比留川と連絡を取ろうとしたのは、なんの前触れもなく彼が桃花と婚約発表をしたからだ。自分と結婚しようと言っていた言葉は嘘だったのかと訴える絵梨に、比留川は「その話に、証拠はあるのか？」と嘲笑ったのだ。

付き合っている間のメールやプレゼントは残してある。けれど、比留川曰く「婚約成立後の婚約破棄ならともかく、気まぐれにちよっと付き合っただけの相手には、なんの法的責任もない」とのことだった。

それどころか、これ以上執拗につきまとうなら、絵梨をストーカーで訴える、とまで言った。

比留川の言うとおり、恋愛期間中の『結婚予告』など、法的にはなんの責任もないのだから。

おそらく、接待に必要だからと話す比留川に貸したお金も、借用書を交わしていないため、泣き寝入りするしかない。

だがどれだけ理路整然と論破されたところで、簡単に割り切れないのが人間の感情だ。しかも比留川は、悔しさに唇を噛む絵梨に「お前と結婚して、俺になんのメリットがある？」と、笑いながら止めを刺した。

結婚におけるメリットと言えば、好きな人と一緒にいられることではないのか。そう戸惑う絵梨に、比留川は「じゃあ俺には、お前と結婚するメリットはないから」と、断言した。

つまり、比留川にとつての絵梨は、『仕事の役に立つから好き』『文句を言わずに、なんでも言うことを聞くから好き』程度の便利グッズ的な存在で、最初から長い時間を一緒に過ごしたいと思える相手ではなかったということだ。

それに比べて桃花は、見た目が可愛く、部長の娘というメリットがある。実家の資産も、絵梨の実家のそれより遥かに上回っている。

「コンペティションに勝てた今、桃花に比べてたいしたメリットもないお前はもういない」。そう、嘲笑う比留川に、それ以上追いつがることは出来なかった。

その時のことを思い出し、絵梨は込み上げる悔しさに下唇を強く噛む。そんな絵梨を気の毒そうに見つめながら、幸根がため息を吐いた。

「最低な男だな。で、相手の女の子は、絵梨ちゃん存在を知らなかったの？」

「……たぶん、知っていたと思います……」

ハッキリ確認してはいないけど、二人の関係が知らなければ、あの日、わざわざ絵梨に「ごめんなさい」などと言ってこなかったはずだ。

それまで黙って話を聞いていた雅翔が、「なんか、最低なカップルだな」と、低い声で呟いた。

声に反応して彼に視線を向けると、雅翔がじっと絵梨を見ていた。

「人の感情を道具のように利用するような奴のために、君が傷付く必要はない」

同情ではなくいたわりに溢れた雅翔の眼差しに、絵梨は再び下唇を噛んだ。

「……」

「どうかした？」

泣いてしまわないように目尻を押さえる絵梨の顔を、雅翔が心配そうに覗き込む。その声の優しさにも、また涙が出そうになった。

「ご、ごめんなさい。……なんだか、自分がバカだから、こんなことになったのかな……とかずっと思ってたから」

比留川が悪いと思う反面、本当は都合よく利用された自分がバカだったのだという自責の念もあって、ずっど苦しかった。

職場では誰にも相談出来ず、その苦しみに答えをくれる人もいなかった。なので、こ
うやって、第三者に『悪いのは比留川だ』と、断言してもらえただけで心が救われる。
言葉を詰まらせる絵梨の肩を、雅翔がポンッと優しく叩く。

「君は、悪くないよ。もし君が悪いって言うなら、それは自分の利益のために恋人を利
用して、最低な形で思いを踏みにする、その男のやり方を正しいと認めることになる。
俺はそんなことを許す人間にはなりたくない」

「……ありがとうございます」

真摯な気持ちで伝わってくる雅翔の言葉に、絵梨は頭を下げた。そして、顔を上げ、
心配そうに見つめる二人に微笑んでみせる。

「あんな人が運命の相手じゃなくてよかったっ！ そう思うことにします」

自分に言い聞かせるように宣言する絵梨に、雅翔が目を細めた。

「ポジティブだね」

「祖母の受け売りですけど。『人生、幸せも不幸も同じ数ある。幸せな人生を送れるか
どうかは、その人が幸せを見つけるのが上手いか、不幸を見つけるのが上手いかの違い
だけだ』って」

「いいことを言うお祖母さんだね」

褒める雅翔に、絵梨は「はい。自慢の祖母です」と、胸を張る。

「そうそう、そんな悪い男のことなんて、さっさと忘れるのが一番だよ」

「そう、ですわね」

カウンターの向こうから励ましてくれる幸根に、絵梨はぎこちない笑みで頷いた。

今さら比留川との関係を修復したいとは思わない。だったら、幸根の言うように、も
う過ぎたことだと割り切って、忘れてしまうのが一番なのだろう。

でも、頭ではそうわかっているけど、つい、比留川と桃花の関係はいつから始まっている
たのか、と考えてしまう。

部長公認で婚約発表をしたのだから、それなりの時間を費やしていたことは間違いない。
ない。

比留川のために、休日を削って働く絵梨のことを、比留川と桃花は、どう思っているか。
いたのだろうか。

比留川が仕事の付き合いで早く帰る時、彼の代わりに残業を引き受けていたけれど、
本当は仕事ではなく桃花とデートをしていたのではないかと。

絵梨が貸したお金は、桃花のために使われたのではないだろうか。

そんなことを考え出すとキリがない。

自分分は、ずっと二人に陰で笑われていたのかもしれない。そう思うと、どうしようも
なく惨めで、居たたまれなくなる。

——でも今の仕事が好きだから、会社は辞めたくない。

だとすれば、どんなに辛くても、忘れたふりをして暮らしていくしかないのだ。下唇を噛み、自分にそう言い聞かせていると、絵梨の肘に雅翔の手が触れた。

「……っ！」

驚いて隣に視線を向ける。そこには、真剣な表情をした雅翔がいた。突然腕を掴まれたことより、自分を見つめる彼の表情に戸惑う。

「君は、それでいいの？」

「え？」

目を瞬かせる絵梨に、雅翔が優しく確認する。

「悪い男に引っかけた。勉強になった。……素直にそう割り切れる？ 後で苦しくなったりしない？」

その気持ちを、言葉にしてどうする？

ここで悔しさを認めたところで、なんの救いにもならない。

そう思うのに、さっき絵梨の気持ちに共感してくれた雅翔に「正直に答えて」と言われてしまうと、自分の気持ちに嘘がつけなくなる。

「……きつと、すごく苦しくなると思います」

雅翔の真剣な眼差しに押され、思わず本音が零れてしまう。

絵梨の言葉を聞いた雅翔は、形のよい眉を寄せて表情を曇らせた。

——そんな顔をされても困る。

どんなに苦しく割りきれなくなっても、絵梨にはこれ以上どうすることも出来ないのだから。

「君はなにも悪くない。だからそんな顔をするんじゃない」

絵梨の目を真つ直ぐ見ながら雅翔が言う。

「でも……」

じゃあ、一体どうすればいいのだろうか。

言葉を探して黙り込んでみると、雅翔がなにかを思いついたように眉を動かす。「そうだ。その男に復讐してやるのはどうだろう？」

「ああ、いいねそれっ！」

カウンターの向こうから、一際明るい幸根の声が聞こえてきた。

「え？」

復讐という禍々しい響きに、絵梨は本能的に拒否感が働く。

表情を強張らせる絵梨とは反対に、雅翔は、爽やかな表情で笑った。

「そう。復讐するは我にありってね」

「それ、本来は違う意味じゃなかったっけ？」

幸根の突っ込みに、雅翔は「あれ？ そうなの？」などと軽いノリで返している。「ちよっ、あの……」

焦る絵梨に笑みを向け、雅翔は自分の唇を人差し指でトントンと叩く。

「とにかく、君はなにも悪くないのに、そんな風に下唇を噛みしめて我慢する必要はないよ」

「……っ！」

辛いことがあると、無意識に唇を噛んでしまうのは、絵梨の子供の頃からの癖だ。自分の感情を押し殺したり、言いたいことを我慢して吞み込んだりする時、唇を噛んでしまう。

絵梨は雅翔から顔を逸らし、そっと自分の唇に指で触れた。

噛みしめ過ぎた下唇がひび割れてしまっている。触った時に痛みを感じるのは、噛んだところが傷になっているからかもしれない。きっと、雅翔はそれを見て気になったのだろう。

「……癖なんです。すみません……」

「謝らなくていい。でも自分が悪くないなら、そんな風に下唇を噛んで、本音を閉じ込める必要はないんだよ」

雅翔は、論すような優しい口調で絵梨に声をかける。

「……」

「ここはやっぱり、復讐でしょう」

幸根の言葉に、絵梨は俯く。

そんなことをしても、きっと後で惨めな気持ちになる。それに、職場での絵梨の立場も悪くなってしまいうに違いない。

「そんな後ろ向きなことしたくないです。きっと、後で虚しくなります」

やけにはしゃいでいる幸根に釘を刺す。でも幸根は、反省するどころか、嬉々とした表情を見せた。

「その言い方だと、前向きな復讐ならありなんですよ？」

「前向きな復讐……？」

それはどんな復讐だ。

眉を寄せる絵梨に、幸根はカウンターから身を乗り出すようにして「ね、それならいいでしょ？」と、迫ってくる。

「まあ、もしそんなものがあれば……」

幸根の勢いに押されて絵梨が頷くと、彼が「わかった」と、笑う。

「じゃあ、そのムカつく男に、前向きな復讐をしようよ。絵梨ちゃんにその気があるなら、そこにいる何でも屋の雅翔君が、復讐に協力してくれるって」

幸根がそう言つて雅翔を指さす。

驚いて雅翔に視線を向けると、雅翔も幸根の発言を肯定するみたいに頷く。

「ええっと……」

絵梨の戸惑いを楽しむように、幸根はこれぞ名案といった様子で話を続けた。

「だって、自分のために女を利用して、必要なくなったら捨てるなんて……同性の俺から見たつて、最低な男だぞ。もし絵梨ちゃんがここで泣き寝入りしたら、その男はビッグビジネスのチャンスと上司の娘婿という立場を手に入れて、めでたしめでたし。そんな理不尽な話、俺は納得できないね。……それにさ、もしかしたらだけど、絵梨ちゃんが泣き寝入りするのも、その男の計算のウチだったのかもしれない」

「……ああ」

それはあり得る話だ。

絵梨の性格を知っている比留川なら、絵梨がこういう時、周囲への影響を気にかけて自分の気持ちを呑み込むと予想出来るはずだ。

それを計算に入れての裏切りなら、それこそ、このまま泣き寝入りするのは悔しい。

そう思う絵梨の隣で、雅翔も表情を険しくしている。

「そんな奴のために、君が泣き寝入りする必要はないよ。こんな終わり方は正しくない」

雅翔は強い口調で言い放つ。その様子から、彼は自分の行動に、強い信念を持っている人なのだろうと察せられた。彼の迷いのない姿勢が羨ましい。

そんなことを思っていると、幸根が笑顔で声を上げた。

「な、雅翔もそう思うだろ？ でも、絵梨ちゃん一人で復讐するのは難しいと思うから、何でも屋の雅翔君が協力してやって」

「いや、協力はするけど、さつきから何でも屋って……」

なにか言いたげに、顔をしかめる雅翔を見て、幸根が愉快そうに笑う。

「絵梨ちゃんの心の傷を癒やすついでに、お前の売り込みしてやってるんだろ」

——ああ、なるほど。

絵梨は内心で頷いた。

幸根が復讐に乗り気なのは、友人である雅翔の仕事の営業を手伝う意図があったのだろう。

「ねっ、雅翔に手伝ってもらつて復讐したらいいよ。そうすれば、絵梨ちゃんは今のモヤモヤした気持ちが解消できるし、雅翔は仕事になる。俺もそんなムカつく男に天罰が下ればスッキリする。……ここにいる三人全員が幸せになれるんだから、これ以上の名案はないと思わない？」

幸根がそう言つて得意げな顔をする。

「でも、復讐って、やっぱりいいイメージがありませんし、なんか法に触れそうで怖いっていうか……」

「もちろん俺も、そんな復讐をする気はないよ」

雅翔が、絵梨の意見に賛同する。

「別に、違法なことだけが復讐じゃないだろ。……なんかないか？ 楽しくて、絵梨

ちゃんのテンションの上がる復讐の方法」

そう言って幸根は、お前が考えろよ、と雅翔をせつつく。

その求めに応じて、雅翔が顎に手を当てて考え込んだ。

「そうだな……」

しばらく悩んでいた雅翔は、不意に悪戯な笑みを浮かべて絵梨と幸根の顔を交互に見

つめた。そして、一つの提案をしてくる。

「どうせやるなら、豪華で楽しい復讐っていうのはどうだろうか？」

「豪華で楽しい復讐……？」

はたして、そんなものがあるのだろうか。

想像ができず、パチパチと瞬きをする絵梨に、雅翔が楽しげに言葉を付け足した。

「そう。しかも徹底的に」

「それいいねっ！」

幸根が嬉しそうに声を上げる。

「豪華で楽しい復讐。……しかも徹底的に……」

嬉々としていいる幸根には申し訳ないが、絵梨には、それがどんなものなのかちつとも

想像が出来ない。

「どう？ そんな復讐なら、悪くないんじゃない？」

「えっと……。よくわからないけど、それでも復讐をするっていうのは……ちよつと」

なかなか踏み切れない絵梨に、雅翔が言う。

「今すぐ決断しなくていいから、少しだけ、お試し期間を作ってみない？」

「お試し期間……ですか？」

「そう。まずは少し、俺の提案する復讐を試してみてよ。それでもし、その内容に君が

納得出来たら、その時は正式に俺に仕事の依頼をする。それでどう？」

「そう言われても……。それに、私には何でも屋さんを雇う余裕はないし」

「お試し期間の間のお金はいいよ。もし君が正式に復讐を依頼する気になったら、その

時に改めて金額の話しよう」

「え、でも……」

何故そこまで積極的に復讐をしたがるのだろうか。困惑しつつ、絵梨は、雅翔と幸根を見比べた。

目が合うと、雅翔がとても真摯な視線を向けてくる。復讐という言葉は重いけど、本気で絵梨のことを思っただけで提案してくれているのがわかるだけに、これ以上無下にするのも申し訳ない。

——とりあえず、お試しだけでもお願いしてみようかな……
 それでどうしても気が乗らなければ、その時は断ろう。そう覚悟を決めて、絵梨は頷く。

「じゃあ……とりあえず、お試し期間ということだ」

「ありがとう」

雅翔が、ホッと安心したように笑う。

「よし。ひとまずは交渉成立ってことで、よろしく」

そう言って差し出された雅翔の手に、絵梨はおずおずと手を重ねた。

「復讐は、豪華に楽しく徹底的に」

そのスローガンを楽しそうに口にする雅翔に、カウンターの向こうで幸根も満足そうに頷いている。

「じゃあ逢坂さん、よろしく」

そう挨拶する雅翔に、幸根が「絵梨ちゃんでもいいだろ」と、突っ込みを入れる。そして絵梨に向けて視線で同意を求める。

「絵梨でいいですよ。幸根さんも、名前で呼んでるし」

絵梨がそう言うと、雅翔がどこか嬉しそうな表情を見せた。

その表情がくすぐったくて絵梨が視線を落とすと、少し恥ずかしそうに絵梨の名前を呼ぶ雅翔の吐息が髪に触れた。

「じゃあ、絵梨ちゃん、よろしくね」

絵梨は微かに揺れた髪を搔き上げ、視線を雅翔に戻して頷く。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

そんな二人のやりとりを見て、幸根がパンツと、手を鳴らした。

「じゃあ、交渉成立の乾杯といきますか」

幸根の宣言に、雅翔がおもむろに自分のカップを手に取り小さく揺らす。

二人に促されて、絵梨も自分のカップを手に取った。

「乾杯！」

そう言ってカップに口を付けると、カプチーノはいつのまにかすっかり冷めていた。

——なんだか、変なことになっちゃったな……

思いもしなかった成り行きだけど、誰にも言えずにいた思いを打ち明けたことで、絵梨が悪いわけじゃないと言ってくれる人たちと出会えた。
 そして彼らは、味方になってくれた。

冷めたカプチーノは、絵梨の心に温かくしみ込んでいった。



「俺はいつから何でも屋になったんだ？」

絵梨と交渉成立の乾杯をしてから一時間後。扉に『CLOSE』の札を下げ明日の仕込みを始めた幸根に、雅翔が不満げな声を投げかける。

「今まで、散々俺の悪ふざけに乗っついて、それはないんじゃない？」

幸根が、悪びれた様子もなく笑う。

「確かに乗っただけど、だからって『何でも屋』って……彼女完全に誤解したぞ」

明日も朝が早いという絵梨とは、連絡先を交換した後、またこの店で落ち合う約束をして別れた。

「なんだよ。一緒に仕事してた頃、お前よく後輩に言ってたじゃないか。俺たち総合社は、平たく言えば何でも屋だ……って」

「そりゃ、言っただけど」

だがそれには、『だから一つの分野だけにこだわらず、色々な情報に興味を持って、常にアンテナを張り巡らせておけよ』と続く。決して、絵梨が考えているであろう職業

ではない。

拡大解釈もいところだと、雅翔は幸根を睨む。

「なんだよ、その目は。……じゃあ、ありのままのお前を紹介して欲しかったのか？ 殿春総合商社、次期社長の桜庭雅翔君です、って」

雅翔が嫌がるのを承知で、幸根が聞いてくる。

案の情、雅翔は露骨に顔をしかめた。

「それはまずいだらう。……今度ウチと、彼女の会社が一緒に仕事をするみたいだし、変に気を使われそうだ」

部署が違うので、雅翔はCM制作に関与していないが、絵梨の勤める会社が殿春総合商社の新CMを手がけるということは知っている。

その件を抜きにしても、殿春総合商社の次期社長という肩書きはなにかと面倒なので、なるべくなら彼女に知られたくないというのが本音だった。

「な、俺の判断は正しかっただろ。ついでにお前の売り込みもしてやったんだから、感謝しろよ」

雅翔に向かって、幸根がニンマリ勝ち誇った笑みを浮かべた。

昔話に出てくる賢いキツネを思わせるその表情を見ると、素直に感謝するの
が、どうにも癪に障る。

雅翔はぐっと眉を寄せて、視線を逸らした。

「しかし、お前と絵梨ちゃんって、不思議な縁があるよな」
 頬杖をついて不機嫌な表情を浮かべる雅翔に、幸根がしみじみと呟く。

「まあ……確かに」

その点については、素直に認める。

絵梨と直接言葉を交わしたのは今日が初めてだ。だが実のところ、雅翔と彼女との関わりは長い。

——始まりは、……やっぱりコイツの悪ふざけだったな。

そんなことを考えていると、カウンターの向こう側にいる幸根に話しかけられた。

「で、彼女の復讐に、ちゃんと協力してやるんだろ？」

鶏肉を切り分け、自家製のタレに漬け込んだ幸根が、手を洗いながら雅翔に確認してくる。

「もちろん。そんな最低な奴のために、彼女が泣き寝入りするなんて許せないから」

「豪華に楽しく、徹底的に復讐する？」

さつき打ち上げたスローガンを幸根が再び唱える。

「そう。……俺に出来ることなら、なんでもしてあげるから、少しでも彼女に元気を取り戻して欲しい」

なにも悪くない絵梨が、苦しそうに唇を噛みしめる姿を見たくない。

そのとっかかりとして、『復讐』という言葉を選んだだけだ。

「それで、どうやって復讐する気だ？ その最低男を、殿春の力で左遷させんにでもするか？」

「まさか。そこまでの公私混同はしないよ」

確かに、殿春の力を使えば、あつけないほど簡単にその男を潰すことが出来る。だがそんなやり方では、きつと彼女は喜ばないだろう。

「ふーん。あれだけプライベートを犠牲さけにして殿春に貢献しているんだから、一度くらい権力を振りかざしたっていいだろうに」

「遠慮しとくよ」

幸根の言葉を、穏やかな笑みで却下する。

「残念」

そう笑う幸根は、冷蔵庫の中からビールを二本取り出す。そしてカウンターの中から出て、一本を雅翔に手渡しながら隣の席に腰を下ろした。

幸根はビール片手に、テーブルランプの下から桜の花びらの形をした紙を引っ張り出す。

その紙には、さつき雅翔が電話のために席を外した隙に、絵梨が急いで書いた文字が綴つづられていた。

照明を落としたカウンター席で、幸根はテーブルランプの光にメモをかざす。「えっと……『サクラちゃん。プロポーズの話、中止です。ちょっと大変だけど、元気です、だって』」

幸根が絵梨のメッセージを読み上げ、雅翔の顔を窺_{うかが}ってくる。

「そうだな。じゃあ『きつとそのうち、いいことがあるから大丈夫だよ』、かな」

「了解」

幸根はそう答えると、ポケットから桜の花びらの形をした和紙を取り出した。そしてそこに、持っていたペンで、雅翔が口にしたメッセージを書き込んでいく。

普段の幸根の字を知っている雅翔には、彼があえて綴_{つづ}る極端に丸みを帯びた字に、つい苦笑いを零_{こぼ}してしまふ。

——今さら、本当のことは言えないよな。

文字を綴_{つづ}る幸根を見守る雅翔は、気まずさから首筋を掻く。

絵梨とメッセージのやりとりをしているサクラの正体は、実は幸根と雅翔だ。

幸根の悪ふざけをきっかけに、雅翔の言葉を幸根が書き記す形で、絵梨との顔の見えない言葉のやりとりをもう一年以上続けている。

「……」

——こんなこと、いつまで続けるんだろう……

いつもそう思うのだけど、自分からやめようとは言い出せないでいた。

そんな雅翔に視線を向けて、幸根がニンマリと微笑む。

「ついでに『素敵な王子様が、復讐の手伝いをしてくれると思います。その人が絵梨ちゃんの運命の人じゃないかな?』とか、書いというてやるうか?」

「バカかっ」

悪乗りする幸根の脛_{すね}を蹴_くってやった。

「痛っ!」

幸根は慌てて脚を引つ込めつつ、怒ることもせず口を開く。

「せっかくだ、楽しめよ。で、ついでに頑張_つって、絵梨ちゃんの運命の人にのし上がれ」

「運命って……」

頑張_つつてのし上がらなきゃいけない段階で、それはもう運命じゃないだろう。

そう思っているはずなのに、絵梨との縁をくすぐったく感じているのも事実だ。

殿春総合商社の未来の担_にい手である雅翔は、多忙な日々を過ごしている。

こんな多忙な自分が恋人を作っても、相手を幸せに出来るわけがない。それに恋愛を成就させるためには、相手の気持ちも必要になる。

だから恋人なんて大それたことは望まないけど、もつと絵梨との繋_{つな}がりが増えればい

いと、願ってしまう自分がある。

そんなことを思いながら隣に視線を向けると、またずる賢いキツネの顔をした幸根と目が合った。

「世の中、そんなに都合良く出来てないよ」

内心とは裏腹にそう返して、雅翔は手にしたビールを呷った。

2 楽しい復讐の始め方

翌日の昼休み。

近くのコンビニでお弁当を買うべく、一緒にオフィスを出た友人の郁美が、不意に呟いた。

「よかった」

「え？ なにが？」

驚いて視線を上げると、長身で細身の彼女と目が合った。

性格がサバサバしている郁美は、スレンダーな体形にベリーショートの髪がよく似合う。化粧も、すっきりしたナチュラルメイクで、どこか中性的な感じの女性だ。学生時

代は女子生徒から「王子様」と呼ばれ、慕われていたという話にも納得がいく。

「なんか最近、元気なさそうだったから」

「……そうかな」

比留川とのことを秘密にしていたので、郁美にも、今抱えている悩みを打ち明けることは出来なかった。そんな自分を、郁美は気にかけてくれてくれたのか……

「元気になったみたいでよかったよ」

「うん、ありがとう……」

なにも聞かずに、それでも静かに気にかけてくれたことが嬉しい。

一人で苦しみを抱えていただけに、今はそうした誰かの存在に救われる。

——そういえば……

昨日知り合った何でも屋の雅翔も、絵梨を心配して復讐を提案してくれたが……

——あれは本気なのかな……

豪華に楽しく徹底的な復讐。そんな復讐があるならちよつと面白そうだけど、どんな復讐なのか想像もつかない。

もしかしたら冗談半分の提案だったのかもしれないけど、二人があまりに乗り気だったので、つい依頼してしまった。

——まあ、本気だったとしても、イヤなら断ればいいし。

とにかく、自分のことを気にしてくれる誰かがいるということは、それだけで傷付いた心を癒やしてくれる。

「あ、絵梨ちゃん！」

そろそろエレベーターホールというところで、背後から甘えた声が聞こえた。一瞬で心が警戒態勢に入る。

心の傷が疼くのを堪えて振り向くと、案の定、桃花が立っていた。

「安達さん」

「やだ、名前で呼んでいいって言ってるのに」

桃花がそう言って艶やかに微笑み、こちらへ駆け寄ってくる。

「あのね、絵梨ちゃん。本当にごめんね」

なんとか平静を装う絵梨の前に立ち、桃花は可愛らしく両手を合わせた。

「え？」

咄嗟に比留川とのことだろうかと思う絵梨に、桃花が言葉が続ける。

「昨日、絵梨ちゃんが自殺する夢を見ちゃったの」

「……はっ？」

予想外の発言に驚く絵梨に構うことなく、桃花が「本当にごめんね」と眉を下げた。「なんでそんな夢を見たのか、私にも全然わからないんだけど……絵梨ちゃんがね、

『不幸過ぎて生きているのが嫌になった』って、自殺する夢を見ちゃったの」

「はあ……」

だからといって、何故それを自分に報告してくるのだ。

あまりのことに、表情を取り繕うのも忘れて桃花を見てみると、彼女がその理由を説明してきた。

「私、嘘とか苦手だから、ちゃんと謝っておきたかったの。だって、そんな酷い夢を見たのに、それを黙っているなんて、すごく悪いことしているみたいなのがして……」

「本当にごめんさい」と、桃花が、一見すると悲しげに見える顔で見つめてくる。

その姿は、なんの悪意もないと錯覚しそうになるほど、愛らしさに溢れている。——あなたがなにも言わなければ、私は嫌な思いをしなくて済んだんですけど……

でも、それを言葉にすれば絵梨の負けになる。

絵梨が感情のままに言葉を口にすれば、桃花はここぞとばかりに被害者面をして騒ぎたてるに違いない。

男性社員にウケがよく、部長の愛娘でもある桃花に謝られたら、こっちは『許す』という選択肢しかないのだ。

「……いいよ別に。逆に気を使わせてごめんね」

白々しい口調になったのは仕方がないと思う。

「よかった。絵梨ちゃん優しいから、きつと謝ればなんでも許してくれると思ってたんだ」

「なんでもを、わざと強調してくるところに仄暗い悪意が滲んで見える。」

「……」

きつく唇を噛みしめて、ざらつく気持ち在必死に抑え込む。桃花は、そんな絵梨の表情を嬉しそうに見つめていた。

その時、郁美が見かねたように口を挟む。

「ねえ、話は終わり？」

財布を振って食事を買いに行きたいのだと意思表示をした。

「あっ！ ごめんさい」

今、郁美の存在に気が付いた、そう言いたげに大袈裟なくらい肩を跳ねさせて、桃花が上辺だけの謝罪をする。

「じゃあ、行こう」

郁美がさっさと絵梨を促してエレベーターホールへ歩きだす。

絵梨がその後が続こうとした時、桃花が絵梨の手を掴んだ。

「あのね。許してくれたお礼に、いいこと教えてあげる。……あんまり安っぽい物を使ったらダメだよ。絵梨ちゃん自身が、男の人から安い女として扱われちゃうか

らね」

「……」

一瞬、なにを言われたのかわからずキョトンとする。

そんな絵梨に見えるように、桃花は手にしている財布を揺らす。それはブランドにあまり興味のない絵梨でも知っている、フランス発祥の有名ブランド品だった。

絵梨が手にしている財布とは、おそらく一桁は価格の違う品。

「普段使いの持ち物は、女性自身の価値を決めるバロメーターなんだから、もっと自分にお金を使わなきゃダメだよ。ただでさえ、絵梨ちゃんはマイナスからのスタートなんだから」

「……っ！」

——それはどういう意味だ。

絵梨が安物しか持っていないから、安い女として比留川にいいように利用されて、捨てられたとしても言いたいのか。

表情をなくし、自然と財布を握る指に力が入る。

下唇を噛んでぐつと言葉を呑み込む絵梨に、勝ち誇った笑みを残して桃花は去っていった。

——最低。

桃花の人間性も、その桃花に女性として負けた自分も。

このまま桃花に、一方的に感情をえぐられ続けたら、さすがに自分を保つ自信がない。これがこの先も続くのかと思うと、仕事を続けるのが辛くなるのは目に見えている。何故自分がここまで仕打ちを受けなきゃいけないのだろう。絵梨は現状への憤りを覚える。

復讐するは我にあり——グッと唇を噛みしめる絵梨の脳裏に、そう口にした雅翔の表情がふと蘇る。

彼のように、自信を持って自分の意見を言えるようになりたい。

「なに、あれ……」

怒りを呑み込みつつもそう呟いた絵梨に、郁美が冷めた声で言ってくる。

「目障りだから早く消えろって、言ってるようなものじゃない?」

「……?」

顔を上げた絵梨に、郁美は肩を竦める。

「比留川が自分のものになって、悔しがる絵梨の顔もじゅうぶん堪能した今、貴女は邪魔だから消えてって、言いに来たんじゃない?」

「えっ!」

郁美に比留川とのかを話したことはない。

立ち読みサンプル はここまで

驚き、表情を強張らせる絵梨の肩を、郁美がぼんと軽く叩く。

「今日は私が奢るから、どこかのお店でゆっくり食べよう」

そう言っ、郁美がさっさと歩き出す。

「えっと……ごめん」

先にエレベーターに乗り込んだ郁美が、絵梨を待つてボタンを押す。そして、申し訳なさそうに肩を落とす絵梨に視線を向けた。

「なにが? 比留川とのかを黙ってたこと?」

コクリと頷く絵梨を郁美が笑う。

「なんでも報告するのが友達ってわけじゃないでしょ。それに私が気付いたのも、比留川の婚約発表の時、絵梨の驚く顔を見てだし。……それまでは、単に比留川のこと好きなのかな? くらいにしか思ってたから」

そこまで気付いていて、なにも言わずに見守ってくれていたんだ。

学生時代、女子に王子様と慕われていたのは、外見だけでなく内面も踏まえてのことだったのだろうと、納得がいく。

「私……郁美が男だったら、惚れてるかも」

「なにバカなこと言ってるの。……まあ、話してくれていたら、こんなことになる前に止めたのって後悔は残るけど」